



書

潮劇場

遠藤周作 メナム河の日本人

新潮社

書下ろし新潮劇場

えん どう しゅう さく
遠 藤 周 作

がわ につ ほん じん
メナム河の日本人

昭和48年9月20日印刷／昭和48年9月25日発行

発行者■佐藤亮一／発行所■株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京808

印刷■株式会社金羊社／製本■大口製本

©1973, Shūsaku Endō, Printed in Japan

落丁本はお取替えいたします

定価 580 円

メナム河の日本人

三幕十二場

〔登場人物〕

山田長政	松
クンサワット侍従長	嘉助
王妃	茂吉
チェト・ター王子	死刑執行人
スリヨタイ姫	医師
シー・シン親王	僧侶たち
ブラクラング大蔵大臣	高官たち
カラホム宰相	侍女たち
女官スチャダー	日本人兵士たち
ペトロ岐部	
モレホン	
加兵衛	
太右衛門	
五郎左衛門	

第一幕

第一場 王宮の広間

町からひびく寺院の鐘の音と仏僧の読經どきやうの声とが聞える。

モレホン　あなたたちの隊長、オーヤ・セーナ・ピモック・長政は何処におられる。

日本人兵士　ただ今、長政殿はあの祈りに加わっておられる。

モレホン　（ベトロ岐部きべに）お聞きの通りだ。毎日、あの物憂い鐘が鳴りつづける。

ソンタム大王の御病氣は長く、このアユタヤの町は今日も重くるしい暑さのなかに沈んでいる。あの方の死の臭い、熱の臭いが町の隅々までこもってい

るようだ。国の内では善き政^{まつりごと}を布かれ、国の外では敵を威圧された大王も、この暑さのなかでやがて息を引きとられる。みんなこの暑さ。なにか人の運命を狂わせるものがある。私だってこの暑ささえなければ、こんな酒飲みの道にはずれた老いばれにはならなかつただろう。(間をおいて) アユタヤという名の意味を知っておられるか。

ペトロ岐部　いいえ。私は日本を離れてもう十年になります。その十年の間、ローマにたどりつき、ローマからこうして戻る間、見知らぬ国、見知らぬ海をどれほど数多く横切ったことか。だが、この土地を訪れたのは今度始めてなのです。

モレホン　アユタヤとは、柔和という意味。響きまでが、やさしい眼をした仔羊を思いださせる。……だが皮肉なものだ。その都がもうすぐ野望の醜い争いの場所になる。大王が亡くなられば、この王宮は二つに割れ、次の王をたてるため、残忍で隠微な争いがくりひろげられる。神は時々、醜い心のもに美しい顔を与えるという悪戯^{いたづら}をなされるのだ。あの塔が月光の寺。あのパ

ゴダが日の出の寺。メナムの流れは西陽をうけ真赤に染まっている。あの河岸の一角に……日本人千人が町を作つて住んでいる。

ペトロ岐部 千人も。私の国の者が。

モレホン 私よりもよくご存知だろうが……お国では迫害の嵐が吹きすさんでいる。逃れた切支丹たちがマカオやマニラやこのアユタヤに来て、商人や一旗あげたい連中と一緒に住みついている。

ペトロ岐部 では日本人町には、あのパゴダのような美しい教会もあるのですか。
モレホン 教会か。むかし私が建てた小さな教会があった。私が司祭をやめてから……白蟻が食い、嵐が走りまわる小屋に変わってしまった。

ペトロ岐部 モレホン神父。

モレホン 神父？ その名で私を呼んでくれるな。もう私はそれに相應ふさわしくない男なのだ。

長政、荒々しく登場。

長政 ひどい暑さだ。風がない。これはモレホン。その酒焼けのした鼻で、何を嗅ぎに来た。まさかあの坊主たちの祈りに加わるわけではあるまいな。

モレホン ほう、いけませぬか。神も仏も信じられぬというあなたでさえ、今しがた、祈禱の真似事をして来られたというのに。世のなかには祈られぬ者と祈れぬ者がおります。あなたは祈られぬ方だが、私は……祈れなくなった人間だ。(トロ岐部に皮肉に) 長政殿は眼にみえるものしか信じられぬお方だ。

長政 そうとも。眼にみえぬむなしい風を掴つかんで何になる。手でつかめるもの、眼でみえるもの、そのほかは信じるわけにはいかぬ。お前も、神とやらを見棄てたではないか。

モレホン たしかに私は身を持ちくずしました男。神を説くには相応しくない酒のみになってしまった。だがこの日本人はちがいます。眼に見えぬものに一生を捧げている。

長政 アユタヤの町の日本人なら、すべて俺は知っている。……見たことのない顔だな……。

モレホン お聞き及びではないか。十年前、日本から海をわたり、砂漠をすぎ、辛い旅の後、聖なる都ローマにて司祭となった日本人のことを。その男が、今、帰国の途中、この国によりやくたどりついた。オーヤ・セーナ・ピモック、旅に疲れたペトロ岐部が、次の船を見つけるまで、あなたの町で休ませて頂けませぬか。私は、あなたに口添えをするほか、この若い神父に何をしでやることもできぬ。(ペトロ岐部に) さあ、これで私のことは忘れてくれ。私は忘れたいのだ、誰からも、神さまからも。(退場)

長政 ペトロ岐部。聞いた名だな。国はどこだ。

ペトロ岐部 豊後、^{ぶんご}浦辺の者にございます。

長政 豊後。とすると、大友家の家臣、岐部殿のお身内か。

ペトロ岐部 はい。父は浦辺の城主、岐部一族にございました。

長政 まことか。侍の血を受けたにしては弱々しげな体をしているな。(腰の刀をぬき) 振ってみろ。

ペトロ岐部、不器用に刀を振る。

長政 その腕では戦えぬ。病なのか。

ペトロ岐部 長い旅の間に、熱病にかかりました。今でも時折、暮れ方になると体が震えます。

長政 (刀を強く振って見せ) 俺などはこの国に来て一度も病にかかったことはないぞ。ようその体で遠いローマに行けたな。なぜ愚にもつかぬ切支丹などになった。侍の子が、刀を捨てて。

ペトロ岐部 では私もお伺いします。長政さまはなぜこの日本人町に来られた。

長政 俺か。俺はな、もとは駿河^{するが}の生れ、大久保治右衛門さまの興^{かど}かきをしてい

たのさ。戦国の世ならば……雑兵^{ぞうひよう}、興かきの身でも力倆才覚の見せ場はあろ

うが、將軍さまの御威勢が、がっしり日本を押えられて、天下泰平の世となれば、興かきは所詮、興かき。思案した末、狭い日本に見切りをつけ、唐天竺^{からてんじく}で暴れてみようと、長崎から船にもぐりこんだ。その船が城井^{きい}久右衛門殿

の持物で、これが運のつき始め、いつの間にやら見も知らぬこのシャムのアユタヤに運ばれてきたというわけよ。

ペトロ岐部 今では、この王宮になくはならぬ日本兵の頭かしらとか。

長政 モレホンがそう言うたか。あの飲んだくれめ。よくあれで、通辞つうじがつとまるものだ。なあに、俺の力もあったが運も良かったのさ。このアユタヤは四隣の国からたえず攻められ、兵も不足しておる。ソンタム大王は俺たち日本人が戦上手であるのに眼をつけられ、久右衛門殿に百人の兵を都合してくれと頼まれた。戦のたびに、百人が二百人、二百人が四百人と兵の数がふえるにつれ、まあ、この俺が頭にさせられ、日本人もこの都で羽振りをきかすようになった。俺のことをアユタヤの秀吉などと言う者もいる。(自慢げに笑う)

ペトロ岐部 なつかしい。

長政 何と言った。

ペトロ岐部 なつかしいと申しました。長い間、遠い国々に住み、日本人に会いませなんだが、今の物のおっしゃりようや笑われかたが、浦辺の城にいた叔

父の自慢話にそっくりで。久しぶりで日本人の汗の臭いを嗅いだような気がします。

長政 そうか。まだ日本の臭いが残っているか。俺などは日本恋しやの気持など
とつくに棄てたつもりだが、町の連中は滅多に來ぬ長崎からの船が、味噌、
醤油、奈良漬でも運んでくれば、涙を流して悦ぶほどだ。それぞれに事情が
あつて二度と故郷（くに）に戻れず、この異国でわびしく骨を埋める身だけに、正月
やひな祭も欠かさずやっておる。お前も長く故郷を離れていた揚句、結局は
恋しゅうなつて戻ってきたのか。

ペトロ岐部 恋しゅうないと言えば嘘になりましょう。だがそれだけではござい
ませぬ。

長政 その体で。よせよせ。それにお前は、今の日本をどうやら知らぬようだ。
日本にはもう切支丹など一人もおらぬ。その上……。

日本人町の加兵衛、太右衛門、五郎左衛門など登場。

長政 いい所に来られた。これはな、モレホンが連れてまいった切支丹のベトロ岐部だ。れっきとした日本人でな。アユタヤに着いたばかりだ。遠いローマと申す都に参り、今、帰国の途中だと言う。何も知らぬのよ、切支丹が日本ではどのような扱いを受けておるか。きっぱり言いきかせてやってくれ。とりあえず太右衛門殿の家にも、当分あずかってやってくれぬか。ところで御三人、そろってこの俺に何の用だ。

加兵衛 長政殿。御存知の通り、お前さまの肩に我々日本人町の行末がかかっております。

長政 今更なに言われる。わかっておる、わかっておる。

太右衛門 ソンタム大王の御命も噂によれば、今日、明日とか。亡くなられば、王宮は、王子をたてる者と大王の御弟シー・シン親王の味方をする者との二つに割れるとか。

長政 (うるさげに) わかっておる、わかっておる。

太右衛門 で、長政殿。その場合、どちらにつかれる。

長政 それを聞かれて、どうされる。

五郎左衛門 加兵衛殿が申された通り、長政殿の肩には我等の行末がかかっております。町の長老^{おさ}としてお話を伺わねば……。

長政 (笑って) なア、御三人。この俺が皆の衆のお蔭で日本人町をつかさどる身になってからもう五年、一度でもお前さまたちの利にならぬことをしたであろうか。

加兵衛 (鼻白んで) いいや。

長政 (しんみりと) ならば任せてくれ。俺は今、何も言わぬ。が、腹はちゃんと決まっておる。そしてこの腹中にあるものは、口にせずとも、わかる時がある。以心伝心、心と心で通じあうときが来る。

ペトロ岐部 (声だけで) これも久しく忘れていた日本人のやり方だ。なつかしい。

叔父上もこうして下^{しも}につく者を丸めこまれた。

五郎左衛門 いや、そうは言われても、町の長老^{おさ}は子供の使いではない。

長政 ほう。それでは、この俺のやり方に……。